注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
魔法少女リリカルなのは～欠損遊戯～

【作者名】
空勝

【あらすじ】
ある日、手足を失ったことで俺の人生は大きく変わった。
魔法少女リリカルなのはの二次小説ですＡｓ後からスタートとなります。

はじめましての方ははじめまして、知ってるよって方はどうも、空勝です。
ちょっと新しい内容が頭の中で暴れまくったので一筆書いてみようとパソコンに打ち込んでみたところまぁまぁのシナリオ構成になったので出してみました。もう一つの方と並行してやっていきますのでよろしくお願いします。

始まり始まり

これは夢だと思う。

クリスマスの数日前、友達のすずかが図書館で出会った子が入院しているということでそのこのためにささやかなクリスマスパーティーをしようということになった。お節介なんじゃないかとも思ったが、同じく友達であったアリサがどんどんスケジュールを決めていき自分も強制という形で参加することになった。

参加者は立案者のすずかを含めアリサ、クラスメイトのなのはに最近転校してきたフェイト、そして俺だ。

女子だらけの中に男一人はつらいなだがアリサに却下された。仕方なしにアリサとすずかに付き合いクリスマスプレゼント選びに買い物に行った。女子の買い物ってホント長いよね、3時間ぶっ通しであっちこっち探し回った。もう二人の頭の中には楽しいクリスマスパーティーの構図が構成されているのであろう。買い物が終了した今現在でも二人の顔はとても笑顔だった。

クリスマス当日、ささやかなクリスマスパーティーはとても楽しい時間となった。途中入院していた子、八神はやてと言うのだが、その子の家族も現れとても楽しいものになった。

クリスマスパーティーが終わりさぁ帰ろうとしたとき病院の入り口でなんだか複雑そうな顔をしたなのはとフェイトがまだ用事があるといい病院に残った。

知り合いが入院しているのだろうかと思った。最近、と言うか今年になってなのはアリサたちに何か隠し事をしているらしい。その隠し事はとても大事なことらしくちょくちょくいなくなったり学校を休んだりしていたのだ。隠し事が嫌いなアリサは一度はなのはに怒って手伝えることはないのかと申し出たことがある。それに対し

なのはは今は話せないがいつか必ず話す旨を自分たちに伝えて一件落着となっていたが。最近は転校してきたフェイトもなのはに合わせていなくなったり休校したりしていた。

そしてそんななのはとフェイトにとうとうシビレを切らしたのがアリサだった。途中までおとなしく帰っていたのに唐突に病院のほうに戻ると言い出したのだ。もう我慢ができないと興奮気味にまくしたて俺やすずかの制止を振り切り病院へと戻ろうとした。しかし戻る途中、何か変な感覚の襲われたかと思うと周りの景色が変わった。街中からどこかの森の中に変わったとかじゃなく雰囲気と言ったほうがいいのか空の色が暗くなり、先ほどまで騒がしかった人の声や車の音、商店街のクリスマスらしいＢＧＭまでも聞こえなくなった。今現在聞こえるのはこの状況に混乱するアリサとすずかの声、そして・・・

ドーン

先ほどからよく聞こえる爆撃音。なにかが爆発する音、崩れる音、何かが何かにぶつかる音などがこちらの不安感を余計に煽っていた。そしてこの状況にいち早く動いたのはアリサだった。爆発音が病院の近くから聞こえたためなのはたちが心配になったアリサが病院に向かって走り出したのだそして現在・・・

目の前には先ほどまでクリスマスパーティーをしていたなのはとフェイトが物理の法則を無視して空中に浮いていて、服装がなのはが学校で来ている制服にアレンジを加えた感じで、フェイトが黒いレオタードのような服に短いスカート、黒いマントを羽織っている。なのはたちは同じ一点を見つめていたのでそちらを見てみるとなのは達同様女性が一人浮いていた。黒を基調とした服装でなんか後ろに黒い羽根が生えていた。

「な・・・のは?」

少しショックを受けているのであろうアリサとすずかは黒い女性には気づかず硬直していた。実際俺もかなり混乱しているのだから。そしてその女性は黒い何かの塊を周りにばらまいた。そう、ばらまいたのだすなわちその塊はこちらにも飛んでくるわけで

「っ!!アリサっ!!すずかっ!!」

慌てて硬直していた二人の襟をつかみ偶々近くにあった隠れられる細い路地に投げ込んだ。とっさのことで丁寧に扱えなかったがこれで二人は安全だ。そして俺は・・・・・・

「ーーーーー」

どちらかの叫び声が聞こえと様な気がしたが俺はその声を確認することもなく意識を失った。

テンプレ通りに言うなら

「知らない天井だ」

ん?違うか?カツ丼?とりあえず視線を動かそうとして気づいたのだが

「左目か・・・」

視点がおかしいと思ったがどうやら右目の周りに包帯が巻かれているようで見えない。そして自分の体を確認して現状が分かった。今の自分の現状それは左腕肘上までなし、左足膝下までなし、それ以外は包帯やギブスが巻いてあるが存在はしている。内臓がどうなっているかはわからないけどとりあえず自分の体の左側の手足を失ったのだ。

「は、ははは、あははは、まぁ上出来だったのかなあの選択も」

乾いた掠れた声が自分の喉から漏れる。自分がこんな感じになったのだもしあの時アリサやすずかに当たっていたら一生ものの傷になっていただろう。生きていたかもわからない。そう考えると手足一本ずつで二人の命を救えたとなると上出来だとほめてもいい。

いや、そう思わないとこの喪失感で頭がコワレソウダ。

コンコン

「失礼しまっ!!せっ、先生!!患者さんが!!」

ドアがノックされ看護婦さんが入ってきたかと思うと俺が目を覚ましたことに驚き慌てて部屋を出て行った。せめてドアを閉めて行ってくれ、なんだなんだと野次馬がこっちを覗いてるから。それから医者が来るまで野次馬のさらし者になった。

あ、俺三島佳祐って言います。

喉は大切に!!

さてさて、俺がここ、ミッドチルダの総合病院で目を覚ましてから二日が過ぎた。その間にたくさんの人が俺を訪ねてきた。

まず、起きた直後に検診に来た看護婦さん、その次にその看護婦さんに襟元を掴まれ引きずられて青い顔をした俺の担当医。そこで知ったのは俺がここに入院してからもう一ヶ月が過ぎたこと。左の腕、足、そして目は回復不可能として切除したそうだ。他、内臓でいくつか損傷を負っていたらしく、その殆どが人工のものに取り換えられたそうな。正直マジであの二人助けてよかったわ、俺で困難だから女の子であるあの二人だったら確実に命を落としていても不思議じゃぁなかった。そこでふと思ったんだけど、人工臓器ってそんなに長持ちするもんなの？最近のニュースじゃぁ確か臓器移植でさえ難儀してるって話だし子供の俺の体に使って大丈夫なのだろうか？その旨を担当医に聞いてみると笑って大丈夫だと一蹴された。どうやら日本の医療技術も進歩してるんだなぁと思っていたら、

「ここミッドの医療技術は最高だ!!何の心配もいらんぞ!!」

そう医者に言われた。ミッド？野球でキャッチャーが使うやつ？いや、あれはミットか？ってかここ外国の病院？などと思っていると、コンコンっとドアがノックされ、一人の女性と俺と同じくらいの背丈の少年が入ってきた。

「失礼します。三島佳祐君ね？初めまして、リンディ・ハラオウンと言います。」

女性のほうがこちらに挨拶をしてくると、担当医は怪訝な顔をしながら入室してきた緑髪の女性リンディ・ハラオウンさんに文句を言う。

「今は診察中ですよ？入室は控えていただきたい。」

なんだろう、さっきまで気の優しい感じの担当医のおじさんは厳しい目をハラオウンさんに向ける。
「すみません、三島君が目を覚ましたとの報告を受けたもので、つい」
畏まるハラオウンさんだがなんだか後ろのほうで悔しそうな顔をする黒髪の少年。名前なんだろう？そんな感じに視線を向けていると少年はこちらの視線に気づき自己紹介を始めた。
「ああ、すまない自己紹介がまだだったな。クロノ・ハラオウンだ。一応言っておくが君より歳は上だぞ。」
おう、ファミリーネームが一緒ってことは親子？などと思っていると
「診察はどれくらいで終わりますか？それまでそこで待っていますので」
ハラオウンさん・・・だと一緒だからリンディさんはどうやら俺に大事な用があるらしい。診察が終わるまで待つっていうのだから相当なのだろう。
「今は簡易診察をしてるだけです。この後、精密検査をするので要件があるならば明日にしていただきたい。」
強い口調で言った担当医。この人、相当リンディさんが嫌いなのかな？でも看護婦さんも睨みつけてる。
なんだろうこの俺だけ置いてけぼりにされたような感覚は。正直わけわからん。
「分かりました、明日、改めて伺います。三島君、意識が戻ってよかったわ。」
そう言い残してハラオウン親子？は病室を後にした。
その後俺もよくわからんがプンスカ怒る看護婦に連れられ様々な機器に体を検査してもらい。終わったのは窓の外が暗くなった頃だった。

翌日、宣言通り、早朝にハラオウン親子？は俺の病室にやってきた。
「まずは申し訳ありませんでした。我々の不手際のせいであなたに大けがを負わせてしまいました。心から謝罪します。」
入って早々に頭を下げて謝られた。しかし、彼女たちが何者なのか知らない俺はなんで謝っていっるのかがわからず、情けなくもかすれた声で「ど、どうぞ」と座るようにしか言えなかった。ちなみに声も声帯に傷を負っているらしく当分掠れた声らしい。椅子に座ったハラオウン親子(やっぱり親子だったらしい。)は自分たちは時空管理局のものだと説明してからここに来た理由は語ってくれた。時空管理局、さまざまな世界、さまざまな次元を行き来し、その秩序と安寧とつかさどる組織らしく簡単に言うと、警察と裁判所が一緒になった様なところらしい。ほかにも文化管理や災害の防止、救助も主な任務としているみたいだ。んでもって今回俺がかかわった事件は闇の書という危険なもの、ロストロギアという代物が起こした事件だったらしい。そこで話されたのは驚くことに魔法の世界に関してだった。ってか魔法って聞いてドッキリなんじゃないかと場違いな疑いを持ち、病室内を見渡してしまった。だって今俺がいるこの病院も魔法の世界、ミッドチルダの病院だということなのだが、全然魔法の世界っぽくないんだが。でもそういえば担当医もミッドがどうのって言ってたし、なんか俺が受けた精密検査の機械も見たことのないものだった。正直実感がわかない。その後語られたのはまず、魔法のこと、それから闇の書の事件のこと。そしてその結末、闇の書の主についての処遇。今回巻き込まれる形となった俺への対処などだった。
「ーーーと言うことなの。・・・唐突であんまり真実味がないとは思うのだけどこれが現実よ。」
「はぁ」
実感わかね～。
「今回、君はこの事件で左の腕、足、そして目を失った。このことにつ

いては管理局の方で責任を持って君をサポートしていくつもりだ。」
少年、クロノは俺に申し訳ないって顔で俺の今後について語った。
「幸いここミッドでは義手義足の技術力は高い。すぐに元の生活に戻れるだろう。」
と、医療系の話になったので昨日から気になっていたことを聞いてみた。
「あなたたち管理局の方はここの病院の人たちとの間に何かあったんですか？」
少し二人の顔が複雑そうに顔が陰った。だが、そんな中口火を切ったのは後ろに控えていたクロノさんだった。
「先ほども話したが今回の事件の処遇について彼らは憤っているんだとは思う。納得出来ないと昨日の看護婦にも言われたんだ。」
今回の事件の処遇、それはつまり、はやて達のことだと思う。闇の書、元の名の夜天の書は主である八神はやて、その守護騎士ヴォルケンリッターは管理局預かりとなって嘱託魔導師として数年間の奉仕活動をすることになっている。また、今回主犯格とされた闇の書のバグと、夜天の書の管制人格のリイン・フォースが多くの罪を被る形となって消えていったそうだ。つまりは死んだことになる。このことに俺の担当医や看護婦さんたちは納得いっていないのであろう。主犯格がいないからと言ってはやて達の罪を軽くしていいのかと。俺を担当したからこそこの憤りを感じたんだとは思うけど。
「君に分かってくれとは言わない。君を守れなかった僕らにも責任がある。だが、彼女たちのことは少なからずでいい、許してやってくれないか？」
クロノさんの神妙な面持ちに少し同情はするがそれはそれ、かすれた声でとりあえず俺の考えを伝える。
「それは無理」
「!!」
とても悲しそうな顔になるハラオウン親子。だけど俺、まだ話終わってないんだよな。
「だって、まだ彼女たちと話してない。又聞きで聞いた彼女たちのこ

とだけで許す許さないの判断はできない。」
　のどが少し痛い、けどこのことはちゃんと伝えないといけないような気がする。一息入れてから
「だから、今度、可能なら彼女たちを連れてきてください。話がしたい。どうなるかはわからない。怒るかもしれない。ただ黙っちゃうかもしれない。けど話して彼女たちの気持ちを聞いてみないとやっぱり分からない」
　最後に「お願いできますか？」と言って締めくくる。あ～、喉が・・・・・もう喋りたくない。
「分かりました。出来るだけ早く会えるように対処するわ。」
「ああ、約束する。必ずはやて達をここに連れてくるよ。」
　二人に約束させた後、ハラオウン親子は後日また来ると言い残しその日は帰って行った。

　そしてお昼にはなのは、フェイト、アリサ、すずかがやってきた・・・・・のだが、正直朝のハラオウン親子より疲れることになった。だってこいつら、入室して俺を見るなりいきなり泣き出したんだもん。なのはとフェイトはよかったよ～などと俺が起きたことを喜びながら号泣。アリサは自分の行動を反省してかずっとごめんなさいと泣いているし、すずかは只々泣くばかりだし、またまた、ドアが開きっぱなしだから野次馬が群がるし。
　結構疲れた。一端はみんな泣き止んだんだが、俺の手足を見るなりまた、アリサとすずかがごめんなさいと泣き始め、釣られるようになのは達も泣き出した。この泣き声の四重奏にはさすがに俺も泣きたくなってきた。
　しかし、騒ぎを聞きつけた看護婦さん（最初に意識を取り戻した俺を発見した人）のメイリンさんが駆けつけ、何とかみんなを鎮めてくれた。
「意識が戻ったのを喜んだり謝ったりするのはいいけど、ここは病院です。お静かに。」
「「「「ごめんなさい。」」」」

子供を叱りつける定番のポーズをとって、メイリンさんは　めっ、と俺を含めてお説教をした。なんで俺まで・・・。

その後は改めて４人に盛大に謝られた。アリサとすずかには責任をとるだの、治療費や今後の生活費を！だの

まくしたてるように言われたが、今回の治療費や今後の生活費はほとんど管理局が出してくれることになっている。ただ、俺が付けることになっている義手、義足はミッド最先端技術のため生活基盤がここミッドに移ることになった。俺たちの世界ではまだない技術だからだそうだ。そのことを話すと４人に伝えると

「じゃあ、あたしもこっちに住む!!」

「私も!!」

アリサとすずかは何を思ったかそんなことを言い出した。う～喉痛いのに、

「それはいい、今回の怪我も自分の未熟さのせい。管理局もいろいろしてくれる。責任感じる必要ない。」

区切り区切りだが何とか言えた。しかし、納得いかないのかなお食い下がろうとするアリサとすずか。

「でも」

「いやよ、元はと言えば私がーーー」

その先を言えばなんだか無限ループしそうな感じがしたので右手で待ったをかける。

「なら、約束して、もう無茶はしないって」

これはアリサにしか言えないことだが一応二人に約束させる。

そのあとは、なのはとフェイトが魔導師になっていることについて説明を受けたんだけど・・・なのはさん？あなたは一年のころから変わらず拳で語る熱血派ですか？正直聞くだけでもハラハラしましたよ。

そうしているうちに面会時間が終わり４人は帰って行った。

喉が〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!

START by START

「ごめんなさい」、そう言う少女がいた。頭を下げ必死に泣きそうな顔で謝る少女。その少女の周りにいる女性や同い年と思われる少女も頭を下げて謝っている。そんな光景に俺は・・・・・・

「起きてください。」

そんな女性の声が聞こえる。夢の少女とは違った凛とした声。そう、さっきのは夢。俺が体験した過去。今は寝ていた俺を起こそうとするこの女性に礼を言って起きるべきなのだが、だがしかし昨日遅くまで仕事と言う名のＧＡＭＥをやっていた俺は眠気がまだ取れていない。よってここで取る行動はーーー

「あと1時間～」

再度寝ることである。

「それはいいですが次に起こしに来るのはレヴィですよ？」

「はい起きます。」

再び聞こえた女性の内容にすぐに意識が覚醒される。

俺が寝ているベッドのわきに俺を起こした女性、髪を短く切りそろえて青い目、ベージュの長袖シャツと薄紫のワンピースを着こなしているシュテル・スタークスが立っていた。

「結構、普段からそのように起きてくださるといいのですが。」

呆れたような眼差しでこちらを見るとそんな一言を言ってきた。

だって、レヴィの起こし方って凄まじぃんだもん。何が楽しくて寝ている人間の鳩尾目がけてダイビングクロスチョップぶちかますんだ？しかも起こしに来たはずなのにそのまま落としに掛かるし。初めてやられた時にはマジで落ちた。程よく首の圧迫で意識を刈り取られた。あん時はディアーチェがすぐに来たから良かったもののマジ死ぬわ。あれ以来、俺を起こすのはレヴィ以外がやることになってはいるが・・・最近みんな俺が素直に起きないとレヴィを呼ぶ。しかも今回のシュテルみたいに警告してくれるならいいのだがディアーチェなんかは無言でレヴィ召喚するからマジで怖い。

「さっさと着替えてください。もう朝ごはんは出来ていますよ。」

「ん～。りょうかい。ついでに顔も洗ってから行くから。」

そう伝えると「分かりました」と言ってシュテルは俺の部屋を出ていく。とりあえず着替えるためにベッドから降りるため布団を剥いで脇に置いてある腕と足を装着する。俺の左の手足は寝るときなどは外している。装着部に負担がかかるから出来るだけ長く装着しないようにしているのだ。まぁ手足も付いたことでやっとベッドから降りた俺は早速着替える。ラフなTシャツにスウェットを履いてから軽くストレッチを開始する。高度な義手義足であるため適度に動かさないと関節部や神経系に刺激が行きわたらず、不調の原因になったりする。これが結構面倒で腕は肘上までないため、指関節に始まり手首、肘をゆっくりと動かす。足に至っては膝下までない状態なので基本的に足首のストレッチのみだ。この動作を全部込みで１０分でやらなければならない。本当は取り外しのない一体型の方がいいのだろうが自分はちょっとした理由からこっちの方がいいのだ。面倒ではあるが重宝してるし。

ドタドタドタ!!

「ボク登場!!」

「ゲフッ!!」

ありのままに言うならば部屋に駆け込んできた女性に鳩尾へのダイレクトキックを受けた。その女性は少し幼さを残した顔立ちに長いツインテール、運動しやすそうなタンクトップの上に裾の短いジャ

ケット、短パンを着込んでいるレヴィ・ラッセル。とても楽しそうな顔をしているのでこのダイレクトキックに対してはさして考えもなしに「唯かっこいいから」でやったのであろう。
「・・・・レヴィ・・・部屋に・・・入る・・時・・は・まず・・・・ノック」
「あ～、ノックね。ゴメンゴメン。忘れてた!!」
まったくを持って悪びれた様子もなくワハハと笑って謝ってくるレヴィ。
ダメージが残っている俺はｏｒｚな状態だ。最近こいつの何気ない一撃は洒落にならんぐらい強豪化してきている。

「あ～イタイ。マジ痛い。」
「ゴメンってば～。」
ゆっくりと階段を下りながらいまだにダメージの残る鳩尾を摩りながら後ろについてくるレヴィに文句を垂れる。それにレヴィも反笑いをしながらも少しは悪いと思ったのか謝ってくる。
「次はもっとかっこよく決めるから!!」
「反省しろ!!」ゴンッ!!
さらなる身の危険を感じたため早々に止めるべくレヴィへの拳骨をかます。
洗面所で顔を洗いリビングに着くと先に来ていたシュテルがテーブルに着いていた。台所ではコトコトと何かを煮込んでいる音と匂いがこちらの感覚を刺激してくる。
「あっ、おはようございます。もうすぐできますから」
笑顔でキッチンから顔をのぞかせるのはユーリ・エーベルヴァイン
きれいなウェーブのかかった長い髪に今は料理中もあって軽く結んでいるが花柄のエプロンと相まってとてもかわいい女性だ。エプ

ロンのしたはロングTシャツにジーパン、そこまでおしゃれする子ではないがとてもいい子だ。我が家の清涼剤だな。
「ふん、いつまでもだらだらしおって、我の作った朝食が覚めてしまうではないか!!この塵芥」
　同じくキッチンにいたもう一人の女性　ディアーチェ・K（キングス）・クローディア　。我が家のキッチン担当兼王様だ。ユーリと同じく肩までである髪を後ろでまとめ紫のエプロンを着けて鍋の中の何かをかき回している、匂いからして・・・・
「ジャガイモスープ？」
「ヴィシソワーズだ!!何度言えばわかる!!お前は・・・バカだったな」
「そんな諦めたような溜息つくなよ。」
　とてもかわいそうなのを見るような目でこちらを見るディアーチェ。口は悪いほうではあるが根は優しい子なのである程度許容できる。・・・・たまにへこむときもあるけど。
「はっやくごはん!!はっやくごはん!!はっやくごはん～～!!」
　いつの間にかテーブルに着いていたレヴィは朝食の催促を始める。スプーンやフォークを楽器のようにしてテーブルを叩く。
「こらレヴィ、行儀が悪いぞ。あんまりにも悪いと王様の朝ごはん食べれないぞ」
　視線をレヴィからゆっくりとディアーチェに移すと意地悪そうな顔をしていた。
「そうだな、食後のデザートはいらないと見た。ユーリ代わりに我々でいただこう」
「いいですね～」
　意図を理解したユーリはとても楽しそうに肯定する。そして視線をレヴィに移すと絶望したこの世の終わりみたいな顔をしていた。ディアーチェのデザートが大好物のレヴィにとって楽しみを奪われるのは最大の恐怖なのだ。そっと食器をテーブルに戻して行儀よく座りなおすレヴィの姿に俺たちや静かに会話を聞いていたシュテルでさえ苦笑していた。
　5人がテーブルに着いたところでディアーチェが気づいたように

シュテルに「そういえばあやつは？」と訪ねる。
「先ほどを宅配便がきていたのでもう戻ってくるとおもいます」
我が家の最後の住人の話をしていたところで、その本人が帰ってきた。
「ケイ、また通販で何か買ったのか？この箱は何だ？」

中くらいの箱を持って現れるリインフォース・アインス